

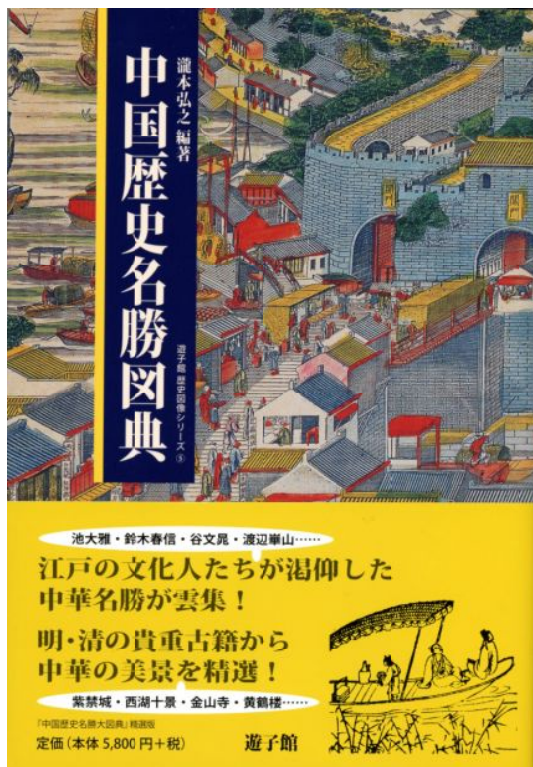
江戸の文化人たちが憧れた中華の名勝を網羅

一月二十一日、遊子館から「遊子館歴史図像シリーズ⑤」の『中国歴史名勝図典』（瀧本弘之編著）が刊行された。二〇一〇年八月に刊行された『中国歴史・文学人物図典』・『中国神話・伝説人物図典』に続いての出版となる。これで、中国図像関連の書籍が三種類が揃った。

新しく出版された『中国歴史名勝図典』には、主として中国明清時期（十六―十九世紀）に刊行された、貴重古籍から選り出した二百近くの著名な歴史的名勝を収録してある。鮮

明な図版は地域別（現在の省名別）に分類され、それぞれに簡明で平易な解説をつけてある（難読語にはふりがながある）。掲載図版は細かい点まで読み取れ、十六―十九世紀の古い本などからの採録とは思えないほどである。

実はこの『中国歴史名勝図典』は、かつて二〇〇二年に出版された専門家向けの『中国歴史名勝大図典』を下敷きに、新たに図版を精選、編集と組版をしながら、一般読者に使いやすく再構成したものである。全く新しく生まれ変わったといつてよい。



中国歴史名勝図典（遊子館刊）

- ・A 5判、456頁。定価 6090円（税込）
- ・カラー口絵 8 ページ。
- ・人名、地名・事項索引完備
- ・瀧本弘之（編著者） 1947年東京生まれ、上智大学フランス語学科卒業。著述家、中国版画研究家、日本民藝館共同研究員。編著に『蘇州版画』『中国古典文学挿画集成』『中国歴史・文学人物図典』など。



室町時代から中国の山水は将軍や大名、禅僧らにとっては、憧仰の的であった。なかでも「瀟湘八景」や「西湖」などは、数多く襖絵などに描かれていたが、実際には雪舟のように渡航して名勝を見たものは極めて少なかったため、描かれた景色の殆どは、想像と憧憬をまじえた日本的な「理想図」になっていた。（鷗亭作「西湖図」部分、京都国立博物館蔵）



●口絵と表紙に使われた「姑蘇閶門図」。江戸時代に舶載されて、浮世絵の勃興を促した「蘇州版画」の一例である。こうした大きな彩色版画で、大胆に遠近法を使った描写には、江戸の浮世絵師たちは驚嘆したことだろう。版画の上部には賛がつけられていて、水上の国際商業都市・蘇州の繁栄ぶりを謳歌している。

この作品が制作された雍正12年(1734)当時の蘇州の人口は、一説に300万とされ、江戸を超えて世界一であった。

「大図典」は大型のB5判の二冊本で、定価も八万円近くの高級書籍だったが、今回は定価も十三分の一に圧縮、図版を選び判型もA5判でコンパクトな一冊にまとめた。だが、ページ数は四五六頁もある。項目数も充分で、索引は人名索引と地名・事項索引が完備している。一般読書家から専門家までが使いこなせる中身が濃い一冊になったわけだが、もうひとつ特色がある。カラー口絵である。

もとの「大図典」にはなかったカラー口絵は八ページあり、これには、江戸中期の「浮世絵」や「浮世絵」の勃興に刺激を与えた、西洋風の中国版画の作品も多数収録している。左図は「地上の天国」と謳われた水上都市・蘇州の最も繁華な地域「閶門」(日本語に訳せ

ば、「天国の門」という意味である)の部分を描いた版画である。十八世紀はじめの同地で制作された彩色木版画で、版画だが世界に一つしかない珍品だ。今日と違い、当時の名勝には大都市そのものも含まれていた。広大な中華帝国で生まれ

エキゾチシズム漂う歴史的珍品の名勝図も収録

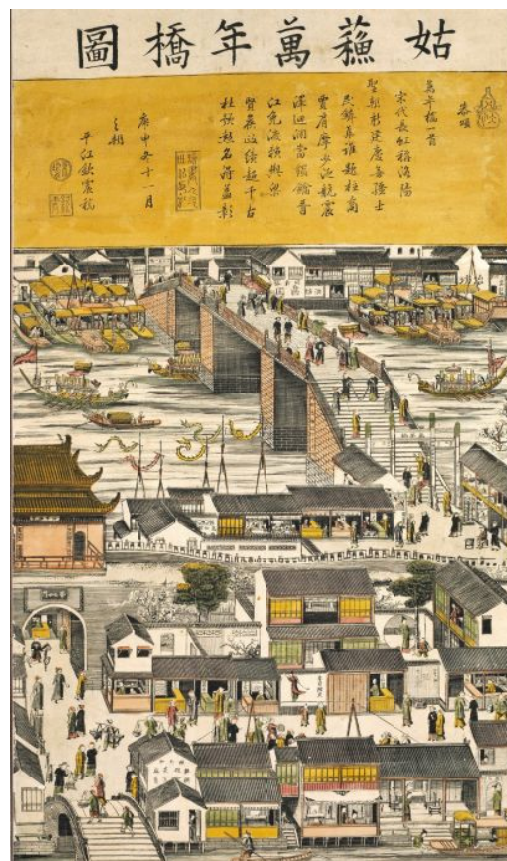
て、そのまま育った土地を離れることが殆どない大衆にとっては、繁栄する都市はそれだけで新鮮な驚きであった。

もちろん知識階級にとっても、名山名水への探訪旅行が楽しみであり、そのなかでも豪華極まる旅行を愉しんだのが皇帝たちである。

清帝国の最盛期を治めた三人の皇帝、康熙・雍正・乾隆の治世は、十七世紀から十八世紀にかけておよそ百三十年にわたって続いたが、そのう



●「西湖十景」。17世紀初めの制作と考えられる。正確な遠近法を適用して細密に描かれているが、実景とは程遠く、名所を皇帝の御意に従って「再構成」している「奇想」の木版画である。一対の左側の図は失われている。



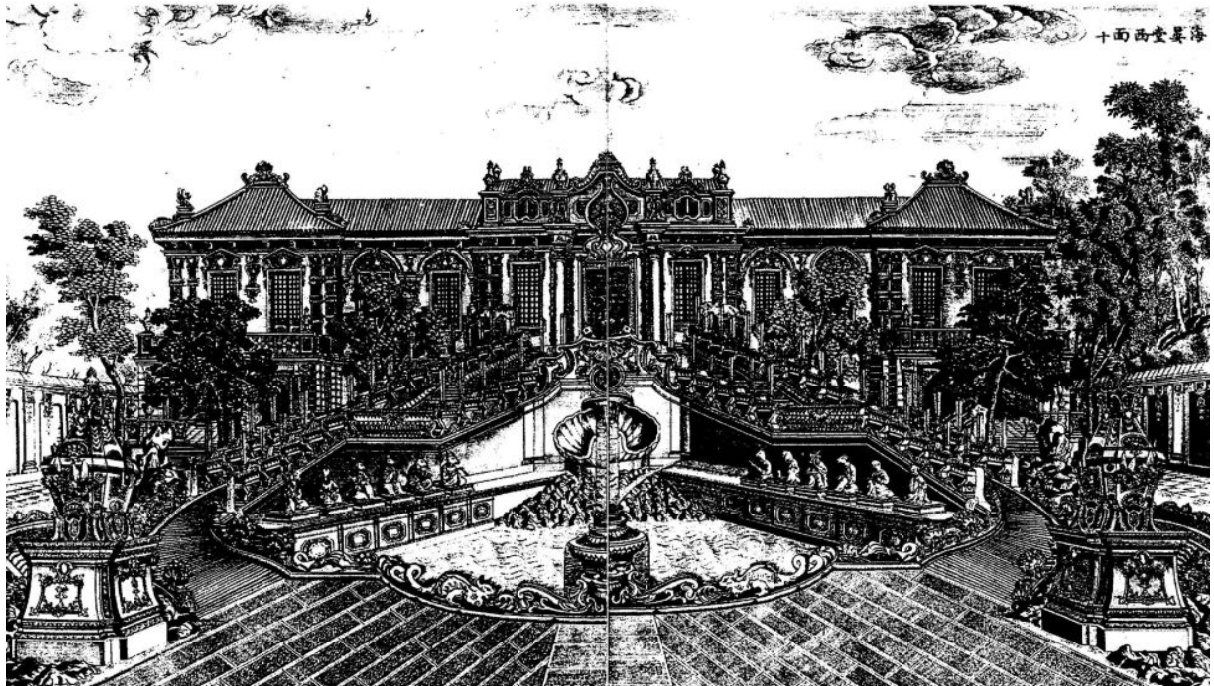
●「姑蘇萬年橋図」。蘇州城門の西側にある橋で、乾隆5年(1740)に完成した。当時は水上交通が商業に不可欠で、大型船が通れる石橋の工事は一大プロジェクトだった。

橋の完成は、この版画の出版される一年前で、城門内の通りでは大道芸人が綱渡りをしている様子が描かれている。経済の豊かさが、町の賑わいとなって現れている。

ち短命だった雍正帝を除く康熙帝・乾隆帝の二人は、特に杭州の西湖を愛した。

彼らが西湖に注いだ思い入れはことのほか大きく、北京郊外の圓明園や承德の離宮にミニチュアの西湖や江南風景をわざわざあつらえるほどだった。

左図は康熙時代に制作されたと考えられる「西湖十景」の版画だが、当時宮廷にいた西洋人宣教師らの影響で、遠近法と銅版画の描写を取り入れている。しかも、これは一対の半分で(右側)、左側には対になるもう一枚が



あったと考えられている。この時代の版画には、山水を描いても中国風の山水ではなく、奇想の名勝図になっているものが少なくない。

● 中華に咲いた西洋の「華」

たとえば、乾隆時代の宮廷では、圓明園の西洋建築を描いた銅版画(上図)もつくられている。圓明園の設計や造成には、西洋人宣教師らがかかわったが、この版画にも彼らの手助けがあっ

た。もともと、制作自体は全て故宮で行われ、銅版の印刷も中国で行われている。本書にはこれらの東西交流の歴史的な美術作品も「名勝図」として多数収録してある。

圓明園は清末に英仏連合軍の侵入で破壊されたから、これらの威容を誇る建築や贅を凝らした噴水などの建築群は、もはや存在しない。人物が全く描かれていないこれらの作品からは、フランスのベルサイユの王宮が彷彿され、まことにエキゾチシズムをそそる。

様々な地域、多様な資料から博搜した名勝図

情報機器の発達した現代と異なって、かつての図像情報の保存と伝達は、ま

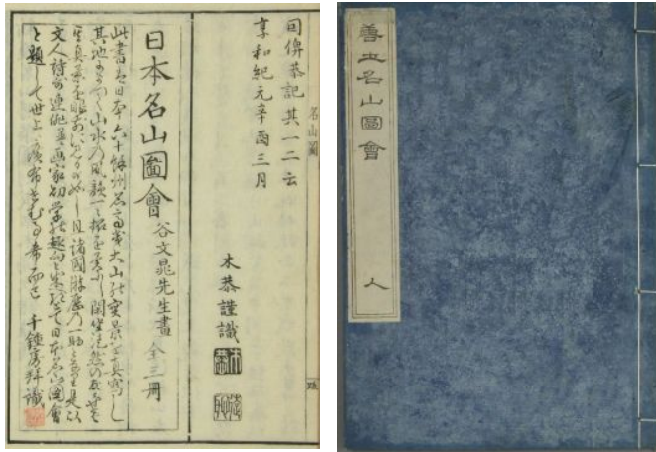
ず筆写により、更には書籍の挿絵として、画譜や画冊として遺された。

日本では江戸時代には重要なこのころ、中国でも名勝への旅行が盛んになり、地誌のなかに旅行案内的な記述を加えたり、名勝案内そのものも多数出版された。これらの画譜などは日本に長崎などを経由して船載され、秘蔵された。

● 覆刻の元になった版本から採録

貴重な中国製の画譜などの書籍は日本で翻刻(覆刻)されたものも少なくなかった。例えば、『八種画譜』や『芥子園画伝』はその代表である。原本が貴重なため、求める人々が多数いることを見越して、覆刻して日本版をつくった。それほどに、中華の書籍や南画・文人画の材料として舶来の画譜は人気があったのだ。

なかには余りに絶妙な挿絵であるために、『太平山水図』のように、日本の職人技でも



●明末の『名山勝概記』を日本で覆刻した『唐土名山図会』。その宣伝には、谷文晁の『日本名山図会』も載っている。

模写・覆刻が叶わなかったものもあるようだ。南画家の谷文晁は明末に刊行された中国歴代の名画を収録した『歴代名公画譜』に感動し、自身が模写して後に覆刻させている。また明末の『名山勝概記』は、これも南画家の鈴木芙蓉によって『唐土名山図会』（別名名山勝概図）として三冊本で享和元年（一八〇一）に江戸書林・千鍾房から刊行されている。本図典では、『唐土名山図会』のもとになった『名山勝概記』原本からも多数の図版を収録している（盤山、太行山、浮槎山、石門山、武夷山、洞庭湖、廬山など）。

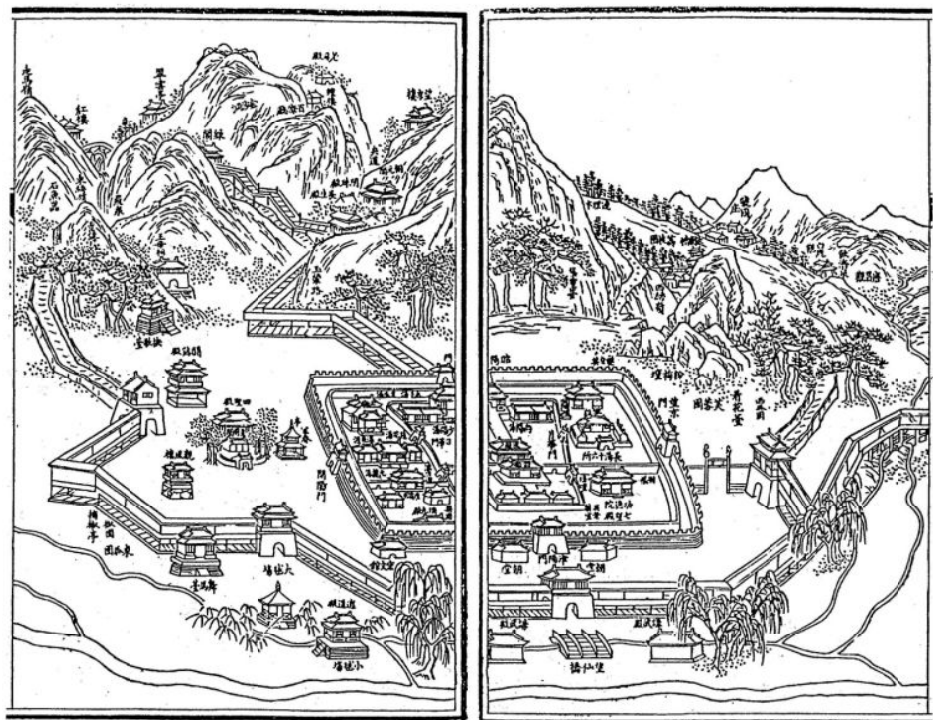
ちなみに、『唐土名山図会』の最後には谷文晁の傑作として名高い『日本名山図会』の広告も掲載されている。

●楊貴妃が入浴した離宮「温泉宮」も

本図典には、余り知られない陝西省の名勝が多数収録されているのも興味を引くだろう。

この地は秦の始皇帝や漢の高祖（劉邦）をはじめとして唐の玄宗皇帝など、多くの歴史的著名人が輩出した地域で、これらの人々の肖像は既に『中国歴史・文学人物図典』（遊子館、二〇一〇年八月）に多数収載されている。本図典には、これら人々が活躍した地域の著名な勝蹟も多数掲載されている。

漢の未央宮は漢の高祖や恵帝らが使用した壮大な宮殿である。唐華清宮はこれも楊貴妃と玄宗皇帝で名高い離宮。長安南東の驪山にあった。温泉が完備しており楊貴妃が湯浴み



●唐華清宮は、別名「温泉宮」ともいわれた。ここに規模壮大な離宮を築いたのは、周の幽王の時代（紀元前8世紀）。のちに秦の始皇帝も驪山湯を開いた。

したことは有名だ。

歴史好きの読者なら、玄宗や楊貴妃の肖像を見ながら、華清宮の図を眺め、唐の時代にはるかタイムスリップして、白居易の「長恨歌」を口ずさむこともあろう。

広西〈桂林〉

秦の時代に桂林郡、漢代に始安郡、隋代に臨桂郡と改められた。明清時期に桂林府があった。民国二十九年（一九四〇）、臨桂県から分離して桂林市が置かれた。古来、中原と嶺南地方を繋ぐ要衝の地で、歴史の古い都市である。

★名勝の所在地についての情報はもとより、名勝地としての歴史も、その変遷が分かるように工夫した。

現在も観光地として名高い桂林。古来、天下に甲たる名勝地として知られていたが、17世紀にはこのような姿で視覚化されていた。これは、清朝の宮廷(故宮・武英殿)で制作された「殿版(官版)」版画の一例である。



廣西〈桂林〉

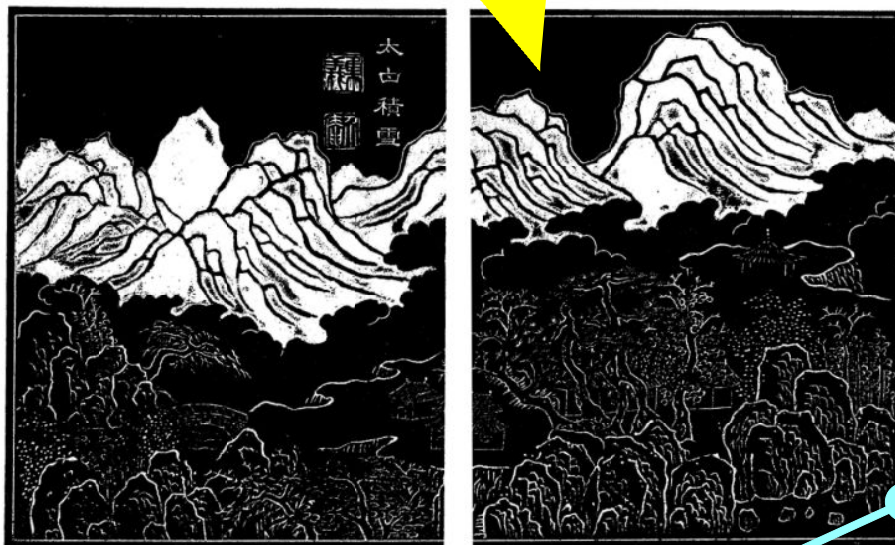
桂林は広西壮族自治区の東北部にある。桂林市の周辺、北は興安から南は潯陽までの百キロメートル余りの漓江(れいぎやう)の山水は、平地に奇岩が突出して「天外奇峰(てんがいきほう)」「象鼻山(ぞうびさん)」といわれる風景を形作っている。遠

明な水を湛えて、善曲する漓江の兩岸には、時や絶壁がせり出すが、一方で緑豊かな平原も展開している。岩山には洞窟が多い。その風景の優美さは、「桂林山水は天下に甲(か)たり」といわれている。

陝西〈太白積雪〉

三國・魏のときの著作と思われる古書「水経」に注釈を加えて、中国各地の水路とその流域を詳しく説明した地理書。

伝統的な山水図が、拓本によって保存されてきた一例である。唐の都・長安の南に位置する太白山は、歴代詩人の格好のテーマとなった。そのボリュームいっぱいの山稜と積雪は、拓本で巧みに力強く表現されている。



陝西〈太白積雪〉

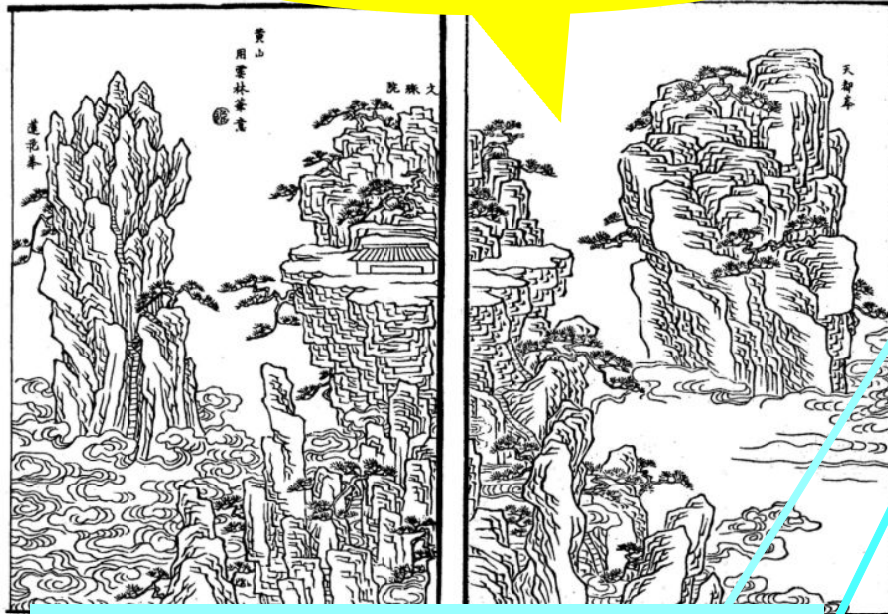
太白積雪(たいはいせきせつ)「Taibai Jixue」(命題中八景図) 太白山は陝西省眉縣の南にあり、秦嶺山脈の主峰の一つである。山頂は海拔三千七百メートルを誇り、漢中地区の最高峰である。高山のため初夏まで白雪を敷き、「太白積雪六月天」といわれ、古水河跡や万年雪もある。「水

経注」には「太白山に武功山を連ね、諸山の最も秀傑と爲す、冬夏積雪し、之を望めば皓然たり」とある。その積雪風景は「漢中八景」の一つとされている。「水経注」は四十巻、北魏の酈道元(りどうげん)の著。

★名勝古蹟に関連する歴史的な背景や、歴史上著名な人物などについては、随時簡潔な解説を加え、必要な場合は生没年や出身地などの情報も付け加えた。

安徽〈蓮花峰〉

現在では、誰でもアプローチができる安全な道がつけられている。
文殊は天都、蓮花の間峰にあった。明の万曆四十一年（一六一三）、普門和尚がここに創建した。崇禎十年（一六三七）に失火で失われたが、次の年に休寧



の汪之龍によって再建された。咸豐十一年（一八六一）に兵火に遭ったが、光緒十三年には文殊像が上海から運ばれて再建されたが、一九五一年にまた失火によって焼けた。現在、その後に玉屏樓賓館が建っている。

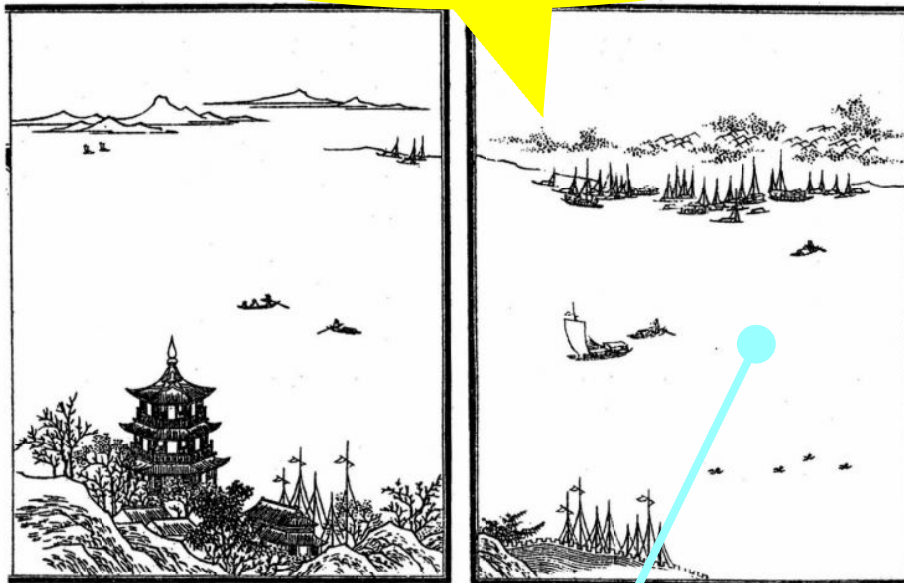
★説明は平易を心がけ、読みにくい漢字にはふりがなを添えた。また、中国語の標準語音をアルファベットの「ピンイン」で表記している。これによって、それぞれの名勝の現代中国語による発音を知ることができる。

安徽〈蓮花峰〉

蓮花峰（れんげほう） Lianhua Peak（安徽山）
蓮花峰は黄山の中部にあつて、高さは千八百六十メートルある。三大主峰のなかでも最も高く、その絶頂には石船と呼ばれる岩がある。この上を登ると、峰の最高点に居るとの感覚が起こってくるという。
記録によると、宋の咸豐四年（一二六八）、呉龍徳、鮑雲、宋復一らは食糧をもつて登峯を試み、三日の苦闘の末、この頂に到達したという。これが文字による記録では、もっとも古い蓮花峰の登峯記録である。

湖北〈黄鶴楼〉

間に創建されたという。後に清代まで四度の改修再建を繰返した。
黄鶴楼を詠った詩は数多いが、最も有名なものは李白の七言絶句「黄鶴楼送孟浩然之广陵」（黄鶴楼にて孟浩然の広陵にゆくを送る）であろう。



故人西辞黄鶴楼 故人西のかた 黄鶴楼を辞し
烟花三月下揚州（烟花三月 揚州に下る）
孤帆遠影碧空尽（孤帆の遠影 碧空に尽き）
唯見長江天際流（唯だ見る 長江の天際に流るるを）

李白の詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に行くを送る」で知られる黄鶴楼。これは清末の画家に手になる山水風景で、雄大な長江がゆったりと流れるさまが、詩意ゆたかに描かれている。遠くにかすむ帆に、文人の心が託されている。

湖北〈黄鶴楼〉

黄鶴楼（こくろう） Huanghe Lou（花甲閣）
黄鶴楼は蛇山、黄鶴山または黄鹄山の黄鶴磯にあるため、この名前がついた。また、説に、昔、仙人が絵の中の鶴に乗って飛び去ったという伝説によって名づけられたという。
蛇山は湖北省武昌の城内にあり、その形状が蛇が伏して頭を上げた形に似ているため名前がついた。長江に臨み、対岸漢陽の龜山と対峙して、古代の軍事要衝として機能した。黄鶴楼は、ここに三國時代の呉の黄武年

日本に将来された中国の古籍版本は、文人画家たちによって秘蔵の粉本として珍重された。鎖国体制下で容易は海外渡航が出来ない時代、彼らは憧れの中華の山水風景を、こうした材料をもとに描いていた。